

世田谷パブリックシアター×ラファエル・ボワテル(フランス)

『フィアース5』第4回報告書〈振り返り〉

呉宮百合香

『フィアース5』の出演者たち。前列左から、呉宮百合香、酒井淳美、酒井大智、酒井大樹、酒井大和、酒井大輝、酒井大樹、酒井大和、酒井大輝、酒井大樹、酒井大和、酒井大輝。

『フィアース5』は、せたがや文化財団(以下「世田谷」)にとってコロナ以後初の国際プロジェクトとなった。本稿では成果と課題、今後の展望についてまとめ、事業全体の総括とする。

公演後の反響

『フィアース5』の出演者たち。前列左から、呉宮百合香、酒井淳美、酒井大智、酒井大樹、酒井大和、酒井大輝、酒井大樹、酒井大和、酒井大輝、酒井大樹、酒井大和、酒井大輝。

2021年10月14日付の『産経新聞』に公演評が掲載されたほか、初日の公演直後よりSNS等にも熱のこもった感想が数多く投稿された。その内容を見ていくと、以下の点に関する好意的な評価が多く見られた。

『フィアース5』の出演者たち。前列左から、呉宮百合香、酒井淳美、酒井大智、酒井大樹、酒井大和、酒井大輝、酒井大樹、酒井大和、酒井大輝、酒井大樹、酒井大和、酒井大輝。

照明効果への言及

光と影を駆使した視覚的な演出効果に対する驚きが際立って多く見られた。

『フィアース5』の出演者たち。前列左から、呉宮百合香、酒井淳美、酒井大智、酒井大樹、酒井大和、酒井大輝、酒井大樹、酒井大和、酒井大輝、酒井大樹、酒井大和、酒井大輝。

作品で表現しているテーマへの言及

作品で描かれる人間模様に感情的に揺さぶられたと述べる声が多数あった。作品解釈が書かれた投稿も複数あり、受け手に様々な想像を促す作りであったことがうかがえた。

『フィアース5』の出演者たち。前列左から、呉宮百合香、酒井淳美、酒井大智、酒井大樹、酒井大和、酒井大輝、酒井大樹、酒井大和、酒井大輝、酒井大樹、酒井大和、酒井大輝。

技術的な操作を演出的に見せることへの言及

出演者の手によって人を宙吊りにする「スパイダー」の場面に典型的に見られるように、危険を伴うアクトの準備や補助作業を演技の一部として見せる演出、そしてそれを成功させた出演者の技術の高さに着目する意見もあった。

『フィアース5』の出演者たち。前列左から、呉宮百合香、酒井淳美、酒井大智、酒井大樹、酒井大和、酒井大輝、酒井大樹、酒井大和、酒井大輝、酒井大樹、酒井大和、酒井大輝。

また、7名の出演アーティストひとりひとりに言及している感想が多いように思われた。演技の細部に関しては賛否が分かれ、特に失敗の演技や感情を発露する演技に関しては、練度不足を指摘する声もいくつかあった。

とはいえ全体的には、舞台芸術としてのサーカスの可能性を提示した作品であること、そしてこの時期に大掛かりな国際共同制作を実現させたことが高く評価された。企画制作の酒井淳美も、アーティストやプレゼンターなど舞台芸術シーンに携わる人にも刺激を与えられた手応えがあったと語った。一点残念であったのは、渡航制限でカンパニー丸ごとの招聘ができなくなったから少数のアーティストを招いて日本版を制作したのではないかという誤った推測が流れたことである。国際事業といえばすでに完成された作品の招聘が主であった日本において、クリエイションへの理解が十分に進んでいないことがうかがえる一件であった。また初年度ということもあり、国際交流基金が新たに立ち上げた「舞台芸術国際共同制作」という枠組みの周知が十分に進んでいなかったことも一因であるかもしれない。

演出家ラファエル・ボワテルの評価

『フィアース5』の出演者たち。前列左から、呉宮百合香、酒井淳美、酒井大智、酒井大樹、酒井大和、酒井大輝、酒井大樹、酒井大和、酒井大輝、酒井大樹、酒井大和、酒井大輝。

演出家のラファエル・ボワテルは、本事業を「学び」と「分かち合い」の場と位置付ける。

『フィアース5』の出演者たち。前列左から、呉宮百合香、酒井淳美、酒井大智、酒井大樹、酒井大和、酒井大輝、酒井大樹、酒井大和、酒井大輝、酒井大樹、酒井大和、酒井大輝。

人生は出会いの連続であり、芸術もまた同じです。交流し、インスピレーションを得たり、発見したり、影響を受けたりすることで、想像し創造する力が養われ、それが芸術を豊かにしていくのです。――メールインタビューへの回答より(2021年10月11日)

前回の来日公演から2年、今回は既存のカンパニー作品をツアーで持ってくのではなく日本のアーティストとコラボレーションしたいという彼女の希望は、当初の想定以上のスピードで実現した。初日が明けてからも毎日細かいノートを行い、クオリティの向上にぎりぎりまで力を尽くしていたボワテルは、千秋楽の終演直後に「舞台上に満ちていたエモーションは、自分だけでなく満席の観客にも伝わったはず」「変化がありありと現れていた」「素晴らしいプレゼントを贈ってもらった」と喜びの表情で語った。そして参加した8名のアーティストについて、専門性が高く仕事ぶりが精確であるだけでなく、熱意と向上心にあふれていたと称賛する。

本番週になって作品が目覚ましく進化したことについては、スタッフ含めチーム全体の信頼関係が深まり、作品に対する想いを共有することができたからではないかと分析し、それまで不足していたのはこうしたコネクションの側面なのではないかと指摘する。リハーサルの時間だけでなくそれ以外の時間も共にすること、たとえば一緒に飲んだり作品以外のことを話したりすることが実は重要で、それを経て本当の「家族」になることができる、今回はその時間が取れなかった、と。これまでの過程を振り返りながら、ボワテルは「あと1か月東京にいられば、もっと先に進めるのに」と繰り返した。

『フィアース5』の出演者たち。前列左から、呉宮百合香、酒井淳美、酒井大智、酒井大樹、酒井大和、酒井大輝、酒井大樹、酒井大和、酒井大輝、酒井大樹、酒井大和、酒井大輝。

事業の成果と課題

『フィアース5』の出演者たち。前列左から、呉宮百合香、酒井淳美、酒井大智、酒井大樹、酒井大和、酒井大輝、酒井大樹、酒井大和、酒井大輝、酒井大樹、酒井大和、酒井大輝。

成果について

4月のオーディション、6月のマスタークラスは来日がかかわらずリモートでの開催となり、9月から10月は約1か月の滞在のうち2週間を隔離期間に取られることになった。対面で作業する時間が大幅に減り、全体的にも極めてタイトなスケジュールとなるなか、酒井淳美は「いつストップをかけるかということを常に考えながら公演に向かっていた」と語る。身体的にも技術的にもかなりリスクが高い作品だ。刻一刻変わる状況に対応しつつも危険を回避するために、常に複数パターンを想定し、ラファエル・ボワテルと共に可能なラインを逐次判断しながら進めていったという。この安全最優先の万全の体制が、本事業の成功には大きく関係していると考えられる。具体的な要因について以下に詳述する。

『フィアース5』の出演者たち。前列左から、呉宮百合香、酒井淳美、酒井大智、酒井大樹、酒井大和、酒井大輝、酒井大樹、酒井大和、酒井大輝、酒井大樹、酒井大和、酒井大輝。

参加アーティストについて

クリエイションの大半がリモートとなるなか、参加アーティストたちには高い自律性と適応力、そしてコミュニケーション能力が求められた。今回選出された8名は総じて上述の能力に長けており、経験豊かな年長者から伸び代が大きい若手まで揃っていて、チームとしてもバランスが良かった。対面の稽古が始まってからもチーム内でディスカッションを重ね、演出家の意見を実際のパフォーマンスに落とし込む方法を全員で模索していた。

また本番用の器具で練習する時間が限られていたこともあり、個人々の能力に頼る面が大きかった。たとえばメインキャスト全員で臨む「スパイダー」の場面は、エアリアル（空中ブランコ）の技術を理解し、かつ慣れているメンバーでなければ、この短期間では実現できなかっただろう。今回選ばれた8名はいずれも、高い専門技術を持っているのみならず経験の幅が広く、複数のテクニックに通じている者ばかりであった。

制作側は、万が一の時に対応できるようにアンダースタディを立て、現場には演出部を待機させていた。大きなプロダクションですら予算削減のためにアンダースタディを立てないことも多い昨今、この選択はリスクヘッジとして評価できる。また楽屋にはポデイトレーナーが常駐し、身体を酷使する出演者の身体のケアを行った。負荷が高い演目にはこのようなバックアップ体制が不可欠であり、今後理解が増進することを期待する。

そして何より、リハーサルアシスタントの導入が功を奏した。本番が迫りチーム全体に焦りが出てくるなかで、常に冷静に全体を見渡しながらサポートをする存在は重要で、安全な進行に大きく寄与したと考えられる。

スタッフ体制について

不確定要素が多いなか、多忙なカンパニー側と協議を重ね、日本側のスタッフに指示を出していく必要があった。カンパニーが現場入りするまでの間は、サーカスの技術面に関する知識があり、ボワテルのことをよく知る酒井が間に立って説明・説得する役割を担った。そして対面になってからは、舞台監督の木村光晴は主にボワテルと、2019年のカンパニー来日公演を経験している照明の野木美侑、音響の阿部史彦は技術監督のトリストアン・ポドワンと密に連携を取り、テンポ良く作業を進めていった。その技術力や責任感には、カンパニー側も信頼を寄せる。

円滑な進行という面では、4月のオーディションから10月の成果発表に至るまで本事業に伴走した通訳の加藤リツ子の貢献も非常に大きい。前回の来日公演をはじめ、世田谷の事業に頻繁に携わっており、劇場からはもちろん、カンパニーからもアーティストからも信頼が厚い。動きながら説明することも多いサーカスやダンスの場合、正確さと共に流れを止めずに訳していく瞬発力とリズム感が特に重要になってくるが、加藤の力により言語の壁を感じさせないやり取りが実現した。

『フィアース5』の出演者たち。前列左から、呉宮百合香、酒井淳美、酒井大智、酒井大樹、酒井大和、酒井大輝、酒井大樹、酒井大和、酒井大輝、酒井大樹、酒井大和、酒井大輝。

カンパニーについて

共同制作の相手方であるラファエル・ボワテルのなかに、日本のアーティストとクリエイションしたいという強い動機があったことも重要である。先にも述べたとおり、本企画の発案者はおもともとボワテルであった。そして稽古中も休憩中も積極的に日本語を使い、観客に対しても舞台上からマイクなしで語りかけるその姿勢には、このプロジェクトを日本で実現することへの熱い想いがはっきりと表れている。

そして演出家である彼女ひとりだけを招くのではなく、カンパニーとして招聘したことも評価したい。ボワテルの言葉を借りるなら、日本チームとフランスチームのいずれもが各々これまで歩んできた道や慣れ親しんできた環境から一歩踏み出して、新しいやり方を見出し、共に前に進む機会になった。この規模の作品でリハーサルアシスタントを務めるのは初めてだというジュリエッタ・サルツも「困難もあったが、アーティストたちがオープンマインドで受け入れ支えてくれた。本当に良い経験になった」と終演後に涙ながらに語った。

欧州で新シーズンが始まるこの時期に、人気カンパニーを1か月間拘束することは容易ではない。ボワテルたちの来日期間中にもフランス・ニースでは別作品のカンパニー公演が行われており、それに帯同していたポドワンに至っては、2週間の隔離期間に対し現場に参加できた期間はわずか6日間のみだ。また作曲家兼音響・照明オペレーターのアルチュール・ビゾンは隔離期間分のスケジュールを確保できず、残念ながら招聘取り止めとなった。それでも活動の中心的役割を担う3名の来日がかかったことは大きな成果であり、日本側・フランス側双方の熱意の賜物である。

『フィアース5』の出演者たち。前列左から、呉宮百合香、酒井淳美、酒井大智、酒井大樹、酒井大和、酒井大輝、酒井大樹、酒井大和、酒井大輝、酒井大樹、酒井大和、酒井大輝。

結果として大きな事故や怪我はなく、良い形で終演を迎えることができた。参加アーティストは皆幅広く活躍しており、今後彼らを通じたシーン全体への波及効果も期待できる。当初の企画趣旨に掲げていた(1)アーティストの育成、(3)舞台芸術の活性化と国際交流については、現在可能な最大限が達成されたと言えるだろう。対して(2)技術者の育成は、今回は十分な実現に至らなかった。この点については次項で述べる。

『フィアース5』の出演者たち。前列左から、呉宮百合香、酒井淳美、酒井大智、酒井大樹、酒井大和、酒井大輝、酒井大樹、酒井大和、酒井大輝、酒井大樹、酒井大和、酒井大輝。

課題について

作品の安全な上演を優先するために、今回の実施は断念し次回以降の課題として持ち越した要素もあった。

『フィアース5』の出演者たち。前列左から、呉宮百合香、酒井淳美、酒井大智、酒井大樹、酒井大和、酒井大輝、酒井大樹、酒井大和、酒井大輝、酒井大樹、酒井大和、酒井大輝。

技術者の育成に関して

クリエイションとは別に、技術スタッフ、制作スタッフ、およびアーティスト向けに、カンパニーからサーカスに関する技術や知識を学ぶ機会を設けることを計画していたが、スケジュール上断念した。

優れた才能を持つアーティストがいても、技術スタッフや制作スタッフの側に正しい知識や確かな技術、そして創作に対する理解がなければ、作品の表現の幅を広げていくことはできない。管理者として安全を担保しつつ、柔軟な発想で変化球を受け止めるだけの度量が求められる。またアーティスト側にも、技術スタッフとの協働により一歩先の表現が実現できることを実際に経験してもらうことが必要だ。

今回は、カンパニー側の音響・照明オペレーターが来日できず、技術監督も公演2日目からは不在ということもあり、各セクションのコーディネートとオペレーションは全て日本側のスタッフが担った。限られた時間となったが、既存作の招聘とは異なる形の共同作業を通じて得られたものは多かったようである。

ボワテルと酒井は共に、技術者の育成と国際交流には今後一層の力を入れたいと意欲を見せる。

『フィアース5』の出演者たち。前列左から、呉宮百合香、酒井淳美、酒井大智、酒井大樹、酒井大和、酒井大輝、酒井大樹、酒井大和、酒井大輝、酒井大樹、酒井大和、酒井大輝。

広義のアーティスト育成に関して

本事業を企画するにあたって、酒井はボワテルに、オーディションをワークショップ形式にするなどできるだけ多くのアーティストがクリエイションに触れられる機会にしてほしいとリクエストしていた。しかしこれも、時間の制約から断念することになった。

国内に多くのサーカス学校があり、カリキュラムも整っているフランスに比べると、日本では職業教育を受けられる場自体が非常に限られている。特定の専門技術を教えるスタジオはあるものの、サーカスの技術を総合的に学べる機関はほとんどなく、「沢入国際サーカス学校」が唯一のサーカス学校となっている。ボワテルに言わせれば、制度や支援が充実しキャリアの道筋がある程度見えていることは必ずしも良いことばかりではなく、時には甘えを生む構造にもなるとのことだが、情熱も技術もある日本のアーティストたちが、教育環境や創作環境の違いから世界の舞台で十分に力を発揮できていないのだとしたら、あまりに惜しい。

このような高水準の国際的なクリエイションが劇場主導で継続されていけば、参加した者のスキルアップの場となることはもちろん、周囲の者にとっても刺激や目標になり、シーン全体の活性化へと繋がるだろう。また実際ボワテルがそうであったように、中長期の創作過程を通じて、文化の違いのなかで育まれた強みを世界の第一線で活躍するアーティストに知ってもらう機会にもなる。

『フィアース5』の出演者たち。前列左から、呉宮百合香、酒井淳美、酒井大智、酒井大樹、酒井大和、酒井大輝、酒井大樹、酒井大和、酒井大輝、酒井大樹、酒井大和、酒井大輝。

海外から作品を招聘するだけではシーンは発展しないという問題意識を抱いている酒井は「創っていく機会を増やし、人材を育て、国内で生まれる作品が安全も確保されたうえでもっとバリエーション豊かになること」が理想だと語る。アーティストとの長期的な関係を重んじ、複数の事業を有機的に連動させていく世田谷の活動に、今後も期待が寄せられる。

『フィアース5』の出演者たち。前列左から、呉宮百合香、酒井淳美、酒井大智、酒井大樹、酒井大和、酒井大輝、酒井大樹、酒井大和、酒井大輝、酒井大樹、酒井大和、酒井大輝。

本事業実現の意義

『フィアース5』の出演者たち。前列左から、呉宮百合香、酒井淳美、酒井大智、酒井大樹、酒井大和、酒井大輝、酒井大樹、酒井大和、酒井大輝、酒井大樹、酒井大和、酒井大輝。

カンパニー・ルーブリエとのコラボレーションは、世田谷にとって今回が2回目になる。2019年に『When Angels Fall／地上の天使たち』を招聘した際は、公演だけでなくワークショップも実施し、その時の参加者が今回の出演メンバーにもなっている。本事業の具体的な話が持ち上がったのは2020年初秋のこと。はじめは2022年度以降の実施を想定していたが、コロナ禍の影響で劇場スケジュールに空きが発生し、さらに国際交流基金のプロポーザルの募集も出て2021年度中の実現可能性が見え始めたことから、急遽短期間で調整し、年末には候補アーティストに声かけを始めた。立案から約1年でこの規模の国際共同制作が実現することは、2年先までスケジュールが埋まっていることも多い日本の大型公共劇場では珍しく、カンパニーとの間にすでに良好な関係が構築されており、温めていた企画案もあったからこそとも言える。

また、次世代を担う30代のプロデューサーとアーティストが連携して実現したという点でも大変意義深い。出演者はもちろん、舞台監督や技術スタッフにも若い世代を起用し、未来に繋がる企画となった。肉体を酷使するサーカスアーティストには、バレエダンサー同様年齢の問題もある。状況が落ち着くまで待っているうちに、現在旬を迎えているアーティストがチャンスを失ってしまうこともありうる。「コロナだからと小さく縮まっていると、全てが小さくなっていってしまう。制約があってもやれることをやって前に進みたい」という酒井の想いが、本作の早期実現を後押しした。

結果として、遠隔では難しいと思われた極めてフィジカルな作品のクリエイションを成功させたことは、世田谷にとっても広く日本の舞台芸術界全体にとっても自信と励みになった。千秋楽のカーテンコールでボワテルが観客に力強く語ったとおり、コロナ禍でも「舞台芸術の文化交流は可能と証明した」のである。



千秋楽のカーテンコール(撮影:片岡陽太) 左から:山本、吉川、皆川、目黒、杉本、長谷川、安本

今後の展望

ラファエル・ボワテルと酒井淳美は共に、今回の公演をはじめの一步と位置付け、長期にわたる共同プロジェクトを構想する。次なる展開としては、まずは2021年11月にポルドー国立歌劇場にて行われる『5es Hurlants』の公演に、フランス版のオリジナルキャストに混じって日本版キャストの長谷川愛実が出演することが決定している。

また本作自体も、フランスのサーカスフェスティバルへの出品やアジアでの巡演を目指している。そしてゆくゆくは、5名のメインキャスト全員が異なる国籍であったオリジナル版のように、様々な出自を持つアーティストやスタッフが国を超えて集うプロジェクトにするというアイデアもあるようだ。身体を共通言語に、異なる都市で様々な文化や観客と出会っていくことで、本作は一層豊かに発展していくに違いない。

本事業はまた、日本の舞台芸術シーン全体の発展のために必要な要素も明らかにした。これまでの創作過程、および企画制作の酒井へのインタビューから浮かび上がった論点を以下に記述する。

クリエイション～プレゼンテーションの大きなサイクルを作る

サーカスの場合、天井高や広さが実寸で取れないと十分な練習をすることができない。また空中芸や綱渡りの器具を使うためには設備自体の強度も必要で、必要条件を満たした施設がなかなかないという課題を抱え続けている。近年では瀬戸内サーカスファクトリー、Circus Laboratory CouCou、関西エアリアルといった民間団体が稽古・創作環境の整備に積極的に取り組んでおり、改善傾向にはあるものの、スケールの大きい劇場作品を制作できる環境が十分にあるとは言えない。

またハイレベルな演出を実現するには、実際の舞台や機構を使って技術

スタッフと共にクリエイションする時間が必須である。しかし施設を貸し出して収益を上げる現行のシステムでは、舞台を長期間使ってクリエイションすること自体が現実的ではない。今回も、カンパニー側からは舞台稽古に1か月は必要だと言われていたが、2週間の確保が限界であった。トップレベルの創造発信拠点と認められた公共劇場であっても貸し館事業を行わなくてはならない運営システムの問題は大きい。

公共劇場の役割について、酒井は「継続する難しさはあるが」と前置きしたうえで、創作から発表までの大きなサイクルを意識したモデルケースを作り、他の劇場にも伝えていくことだと語る。施設はあっても対応できるスタッフや評価できるプレゼンターがいないために受け入れが進まないという問題を解消すれば、活動の場は間違いなく広がる。そしてゆくゆくは、劇場が主導するだけでなく、作品を制作して持ち込むアーティストと才能を見出す劇場との間に好循環が生まれることが理想だと将来を見据える。

大道芸と劇場公演の客層を混ぜ合わせる

大道芸フェスティバルは今や全国各地で開催されており、サーカスの潜在的観客層は広い。しかしながら、大道芸と劇場公演の客層にはまだ開きがあるのが現状であるという。実際には技術的にとても近く、今回出演しているなかにも大道芸の活動をしているアーティストは複数いる。

世田谷の強みは、25年来「三茶 de 大道芸」というフェスティバルを地元商店街と共に続けつつ、劇場にて優れた現代サーカス公演をプロデュースしてきたという両輪の実績があることだ。酒井自身も「三茶 de 大道芸」の制作チーフを務めるなかで現代サーカスに興味を持つようになったという経緯があり、「こうした作品が劇場での楽しみを知るきっかけになってほしい」と意気込む。

現代サーカスを取り巻く制度と言説をアップデートする

酒井にとって印象的であったのは、これまで招聘したアーティストたちが皆一様に「他に呼び名がないから“サーカス”と言っているだけで、境界線を引きたいわけでは全くない」と語っていたことだという。『フィアース5』がまさにそうであるように、現代サーカスには、いわゆる伝統的なサーカスよりはコンテンポラリーダンスや現代演劇に近い作品も多い。様々な表現を取り込む自由な発想と、強度ある身体性を併せ持つそのポテンシャルは高く、日本の舞台芸術全体の活性化を促す起爆剤ともなりうる。

そのためには、縦割りの発想が未だ残る制度や言説の側もアップデートしていく必要があるだろう。アーティストたちはすでに先に進んでいる。彼らが生み出す多様な表現を受け止め、より広範な観客層に届けていくために、現代サーカスをジャンルとしてではなく「アプローチ」として捉え、現代舞台芸術という広い視野から活発に論じることこそが今求められているのではないだろうか。

発言の出典

ラファエル・ボワテル

- ・2021年10月10日、ポストトーク内での発言(聞き手:酒井淳美)
- ・2021年10月11日、メールインタビューへの回答(質問者:呉宮百合香)
- ・2021年10月11日、映像用インタビュー(聞き手:酒井淳美)
- ・2021年10月11日、公演終演後の対面インタビュー(聞き手:呉宮百合香)

その他、稽古中の発言より

ジュリエッタ・サルツ

- ・2021年10月10日、ポストトーク内での発言(聞き手:酒井淳美)

その他、稽古中の発言より

酒井淳美

- ・2021年5月14日、打ち合わせでの発言
- ・2021年11月4日、Zoomでのインタビュー(聞き手:呉宮百合香)

参加アーティスト

- 皆川まゆむ、長谷川愛実、杉本峻、目黒陽介、吉川健斗、山本浩伸、安本亜佐美、吉田亜希
- ・2021年10月11日、映像用インタビュー(聞き手:酒井淳美)